



年間第 11 主日 (マルコ 4:26-34)

イエス・キリストは身を寄せる陰、巢を作る抛り所

年間の主日に入りました。今週から「年間第 11 主日」のように単調な呼び方の主日を重ねていきます。少しでも福音朗読の学びを工夫して、記憶にとどめるようにしたいと思います。

「福音朗読の学びを工夫する」と言いましたが、韓国語で「勉強する」という単語の基本形は「공부하다」といって、日本語では「工夫する」を連想させる単語が使われています。なぜ韓国語の単語を思い出したかということ、まだ勉強を諦めていないからです。

今も NHK ハングル講座にしがみついております、韓国語でミサをささげて、皆さんが呆気にとられながらミサにあずかる。これが私の韓国語学習の最終目的であります。ミサにあずかって呆気にとられるのはあくまでも田平教会の皆さんであって、他の教会の信者ではありません。気持ちはまだ失っておりません。

さて今週のたとえば、「成長する種」のたとえでした。具体的に「からし種」のたとえば紹介されていますので、「からし種」のたとえばから学びを得ることにしましょう。

いろいろ調べてみると、「からし種」と言われている種はひょっとしたら「からし」ではない可能性があります。それはここでは取り扱いませんが、仮に「黒からし」の種だとすると、この種は成長すると2メートル半くらいまで伸びるようです。ただ、2メートル半に伸びた植物に鳥が巢を作るのかと言われると、これはこれで疑問であります。

いずれにせよ、「種の小ささ」と「成長した時の大きさ」が強調されて神の国を説明しているわけです。神の国の始まりは、あまりにも小さい。けれども、成長して陰を作るし、成長して鳥が巢を作るのです。

カンカン照りの中で、陰を作る場所がどれだけありがたいかは皆さんもよくご存知でしょう。私はボート釣りに出て、どこにも陰がない中で2時間釣りをしたりしますが、釣れなければそれはバーベキューの鉄板で焼かれているようなものです。時々通過する雲のなんとありがたいことでしょう。

鳥が巢を作ることにしても、か弱いのちである雛を安全に育てるための巢です。天敵から身を守れる場所でなければなりません。今年はツバメが教会に来ていませんが、毎年決まって、教会の南側玄関に巢を作ります。巢を作るスペースはほんの僅かですが、この場所の風を避けるためには、この聖堂のような大きなよりどころが必要なのでしょうか。

さてここまで考えてきて、神の国とは何なのか。分からなくなってきました。今日皆さんに、神の国をどう示せば良いのか、頭を抱えてしまいました。ようやく出てきた答えは「神の国とは、イエス・キリストのことである」ということでした。

そう思って考えてみると、イエス・キリストはこの地上に御父から種蒔かれた神の独り子です。小さな国に過ぎないユダヤのヘロデ王から

命を狙われるほど、「土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さい」(4・31) 始まりでしたが、語られることばと一つひとつの振る舞いは、「成長してどんな野菜よりも大きくなり」(4・32)、信じる人々には陰を提供し、か弱い命を守り育てる巣を作る拠り所となったのでした。

もし、「成長する種」のたとえで言われている神の国がイエス・キリストであるなら、私たちはどう振る舞えば良いのでしょうか。一つはイエス・キリストの陰に身を置き、巣を作る拠り所とすることです。私たちが陰として身を置くのは権力や金ではないのです。巣を作る拠り所もそうです。

もう一つの振る舞いは、神の国がイエス・キリストであるなら、私たちもイエス・キリストと一緒に、まだ教えを知らない人、信仰に導かれる可能性のある人たちの身を寄せる陰、巣を作る拠り所になるということです。

田平教会は聖堂の保存修理と耐震補強に取りかかる準備を始めました。あと2年もすれば、聖堂に足場がかけられて、しばらくは聖堂が使えなくなるでしょう。しかし保存修理と耐震補強を終えれば、安全性が高まった聖堂に生まれ変わります。これまで以上に、私たちの身を寄せる陰、拠り所となるでしょう。

さらに耐震工事を終えた同じ聖堂は、すべての人にとって拠り所となるでしょう。その日はまだ来ていませんが、一つずつ段階を踏んで、生まれ変わった聖堂を祝う日が必ず来ます。これは私たちにできる証し、イエス・キリストが神の国であることを人々に知らせ、すべての人の拠り所にしてもらおう具体的な取り組みなのです。

神の国には、暑さをよける「陰」があります。弱い命が守られる「巣」を作る場所もあります。その「神の国」とはイエス・キリストそのものでもあります。イエス・キリストのもとで陰を見つけ、巣を作る場所を得ましょう。そしてイエスを知らない多くの人にも、陰を求めることが出来る、巣を作ることが出来ることを証ししていきましょう。